

[巻頭言]

情報システムとニュー・ノーマル

川野 喜一

情報システム学会 副会長

■価値観の変化と情報システム

新型コロナウイルス感染症のパンデミックで、暮らし、仕事、学び、遊び、全てで私たちを取り巻く状況が様変わりしてしまいました。一番大切な命や健康への危機感から、これまでの価値観が大きく変わりました。変化は生活、経済、教育、医療、防災、行政など、様々な分野で起こっており、これらを支える情報システムにも、変化への対応や新たなサービスの提供が求められています。

この変化は不可逆的であり、元に戻ることはないと思います。人間中心の社会を謳う Society 5.0 も、コロナ禍後のニュー・ノーマルの視点で見直され、「世界最先端デジタル国家創造宣言・官民データ活用推進基本計画」の変更版が去る7月に公開されました。新型コロナウイルス感染拡大の阻止やデジタル強靱化社会の実現策などが施策例とともに示されています。

■情報システムが届ける「価値」

情報システムが届ける「価値」を考えることは、コロナ禍の有無にかかわらず必須なことです。

約 40 年、防衛分野の情報システムの構築やサービスの提供に携わってきました。そこでは、国民一人ひとりへは、安心・安全という価値の提供が求められ、災害や緊急事態の現場で働く自衛隊員へは、正しい情報（データ、インフォメーション、インテリジェンス）を迅速に提供するという価値が求められました。IT の効率的な利用に加えて、組織の特性、組織間の連携（相互運用性）、事態の推移に応じた態勢移行、実務者や意思決定者の行動特性などを考慮したシステムデザインが求められ、個人や組織としての人間の情報行動の理解の観点からのアプローチが不可欠でした。

緊急事態下で、またコロナ禍後のニュー・ノーマルの状況下で、情報システムがどのような価値を創造し、その価値をどのように連鎖させて、一人ひとりの心に届けるか、人や組織・社会に届けるのかを考え、検討することが重要であることを、あらためて肝に銘じたいと思います。

社会のデジタル化の加速が叫ばれていますが、デジタルイノベーションや DX（デジタル変革）の実践においては、単に IT や AI の活用、データの利用を行うだけでなく、システムデザインの段階から、人間を中心にした価値創造と価値連鎖の検

討をしておくことが必要です。

情報システムを実現するための技術の研究や開発についても同じ事が求められると思います。

■変わらない「価値」

情報システム学会の設立記念講演会で、哲学者の今道友信先生が「人々の本当に幸せとは『他者のために捧げる』ことです。他者のためになることを為す、と云うだけでは駄目で、具体的に徳目として人に訴えることが重要なのです。倫理とは準拠するだけでなく、お互いが創出していくものです。（中略）倫理についても、情報システムに携わる人たちが、情報社会における徳目を創出していくことが重要なのです。」とお話しされました。

状況が変わっても、人が人として目指す「価値」は不変だと云うことだと思います。届けてもらう価値ではなく、「届ける価値」の視点を忘れてはいけないという戒めとします。

■情報システム学会の役割

学会誌は、情報システムに関わる研究者や実務者が「人間中心の情報システム」を志向した研究の成果を公表する場です。学会誌に加え、研究者や実務者が、学際的にまた業界を超えて相互研鑽する場を設けるのも学会の重要な役割です。

実際に集まったの開催は難しい状況ですが、会員の皆さまには、オンラインでの研究会やシンポジウムなどの場で、パンデミック状況下及びコロナ禍後のニュー・ノーマルに向けて、我が国がこれから目指すべき情報社会の在り方や、情報システムの在り方について議論を深めていただきたいと思います。

また、議論の成果を社会への提言などの形で情報発信していくことが必要です。「健全な情報社会の発展に寄与する」と云う、本学会の設立趣意に立ち返り、微力ながら取り組んでまいりたいと思います。

著者略歴

川野 喜一（かわの きいち）

1976 年 東京大学工学部卒業、同年 富士通株式会社入社、2016 年まで防衛システム部門で SE・研究職・経営職として勤務。現在 情報システム学会 副会長、学会メールマガジン編集委員長。